

第五節 敷石地上絵の性格について

は じ め に

この遺構については、唐渡宮遺跡の四節ならびに九節で記してきた通りである（第108図）。そこでの問題点のいくつかを整理すると、第一に敷石地上絵は何を表しているのか、第二になぜ意識的と思えるほどに、先住者の住居址をすっぽりと覆い重ねているのか、第三にこれら二点を含めた祭祀の内容とはどのようなものなのか、という三点になろう。

こうした石の遺構の出土例は増加してきているものの、様態が複雑なせいもあって、抽象的な解釈しかされていないのが現状である。そうした現状を踏まえ、ここでは具体像を描くことを目標とし、同様な遺構と比較しながら本址を位置づけていきたい。

類似遺構との比較

まず、唐渡宮の配石を概観しておこう。遺構は南東向きの緩斜面に構築されている。蛇行する帯状の石敷は東西両側にあって、谷側の一点で接触してまた広がっている。山側には、「く」字に折れた石敷から直線的に東西を結ぶように石がならび、そこは他より大きな石を用いてある。その中央北側に接して小竪穴があり、さらにその穴に接する山側に古期ロームを固めた土壇がある。そしてこの石敷内には、時期の異なる黒浜並行期の住居がすっぽりとおさまっている。

このように、いくつもの施設が関連して一体となっているものは他に例をみないだけに特異といえる。そこで、個々に類似する部分を比較検討していくことにしたい。

まず、配石および石敷の状態は、伊勢原市下北原遺跡の環状組石遺構としたものに類似する。⁽¹⁾ 西側の一部には、環状組石部分から発した石列が「く」字状に並んでいる。同様なものは東側にもあって、一部は石を立てている。唐渡宮の石敷も、端部に近いところがそれぞれ「く」字状に折れており、状況はよく似ている。また下北原の配石の西側には、あまり整ってはいないが三角状に飛び出した部分があり、遺構全体からするとこの場所は本址の小竪穴の部分に相当すると思われる。更に南側の組石の中間内側に接して、直径60センチもある丸石が置かれている。本址の石敷にも同じところに接して大石が据えられており、単なる偶然とは思えない。また、少し形の違う軽井沢町茂沢南石堂遺跡の配石では、同じところに石棺墓が組み込まれており、⁽²⁾ この場所がただならぬところと推察される。

つぎにすっぽりと収まっている住居址だが、茂沢南石堂遺跡に類例がある。環状の配石中には、同心円状に曾利Ⅲ式期の住居が重っている。配石の時期は後期堀ノ内Ⅰ式期であり、やはり異なる時期の遺構が重なるというのは、偶然の出来事とは思えない。また先の下北原の配石では、中央部分が空いていて住居こそ重なっていないものの「配石下面は黒土層の堆積が厚く……」という所見は意味深い⁽³⁾。ところで前例と少し異なるが、外側の環状配石と住居が複合している修善寺町大塚遺跡9号址は、双方が一体となった構造であるという点で重要である。⁽⁴⁾ そして、これらの見方を少しかえて、同心円状の重なりという点で考えると、厚木市下溝稻荷林遺跡の環状配石や、⁽⁵⁾ 修善寺大塚の円形配石などの状況も同一なものと見做せよう。すると稻荷林の配石断面にみられるマウンドや、花弁状に配列して中央を凹めた修善寺大塚の配石の様態も、内なる円に特別な意味をもたせた意識的な造作と解釈できる。住居は確かに住もうところだが、一方で内なる円としての意味を有しているようだ。

このように配石を比較してみると、内容はかなり複雑だが遺構の状況はそれぞれ近似しており、これらが一つのものを表した変種または個体差であって、写実的なものから写意的なもの構造物であろうという仮定が立てられそうだ。そこで、以前に若干の検討をしたことがある⁽⁷⁾が、改めて土器の図文と対比しながら検討してみよう。

配 石 の 意 味

まず形のうえからも単純で、しかもよく整っている下溝稻荷林からみていく。これとよく整合するのは、藤内遺跡から出土した有孔鍔付土器に表された図像であろう。ペン先状に飛び出た部分は双環把手に、二重の環状の配石は円環文に、外側の環状配石から発する東西の石列は、下手から円環をU字形に囲む隆帯に対応合致する。それは、模式図を介することによって一層了解できよう。また、環の中心部の火焚場とする部分がマウンド状に高くなっていること、ペン先状に飛び出た部分から内側の火焚場へ延びる配石などは、同じ土器のいま一方で描かれた人物像の背中の表現と一致する。

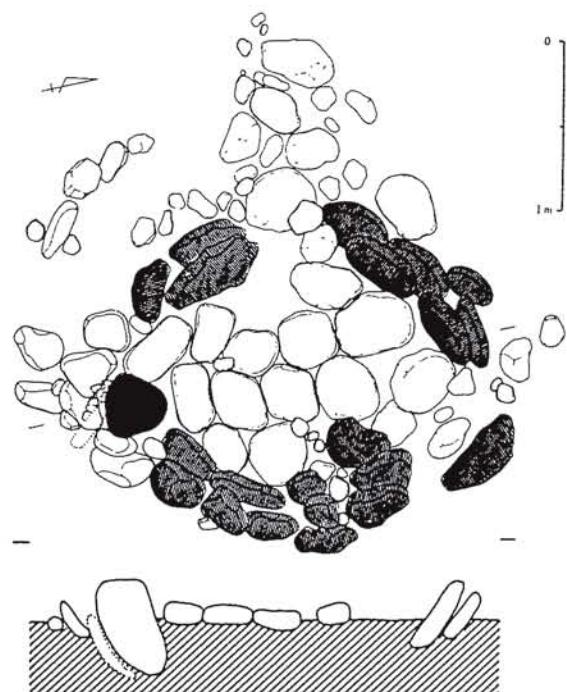
ところで、この土器文様に関しては小林公明の解釈があり、他の土器と比較しながら当時の世界観にまで言及している。⁽⁸⁾ 詳細はそれに拠るとして、この文様解釈の大略は「双環把手と組み合あって、蛙・女性器・月を表象するもの」で、環状文とそれを囲む隆線は「新月とこれから甦る旧い月」だという。つまり双環把手は眼であると同時に頭、環状文は胴体、下手の隆線は腕に相当する。これにより同様な形状の稻荷林の配石は、三者を合わせもったものと理解されよう。つまりペン先状の部分が頭、二重の円環が背中ないし胴体、そして南北に延びた石列が腕に対応できる。すると、同類の茂沢南石堂や修善寺大塚9号址も同様の解釈ができる。

つぎに、修善寺大塚遺跡の円形配石とした小ぶりな配石を見てみよう。これは井戸尻4号住

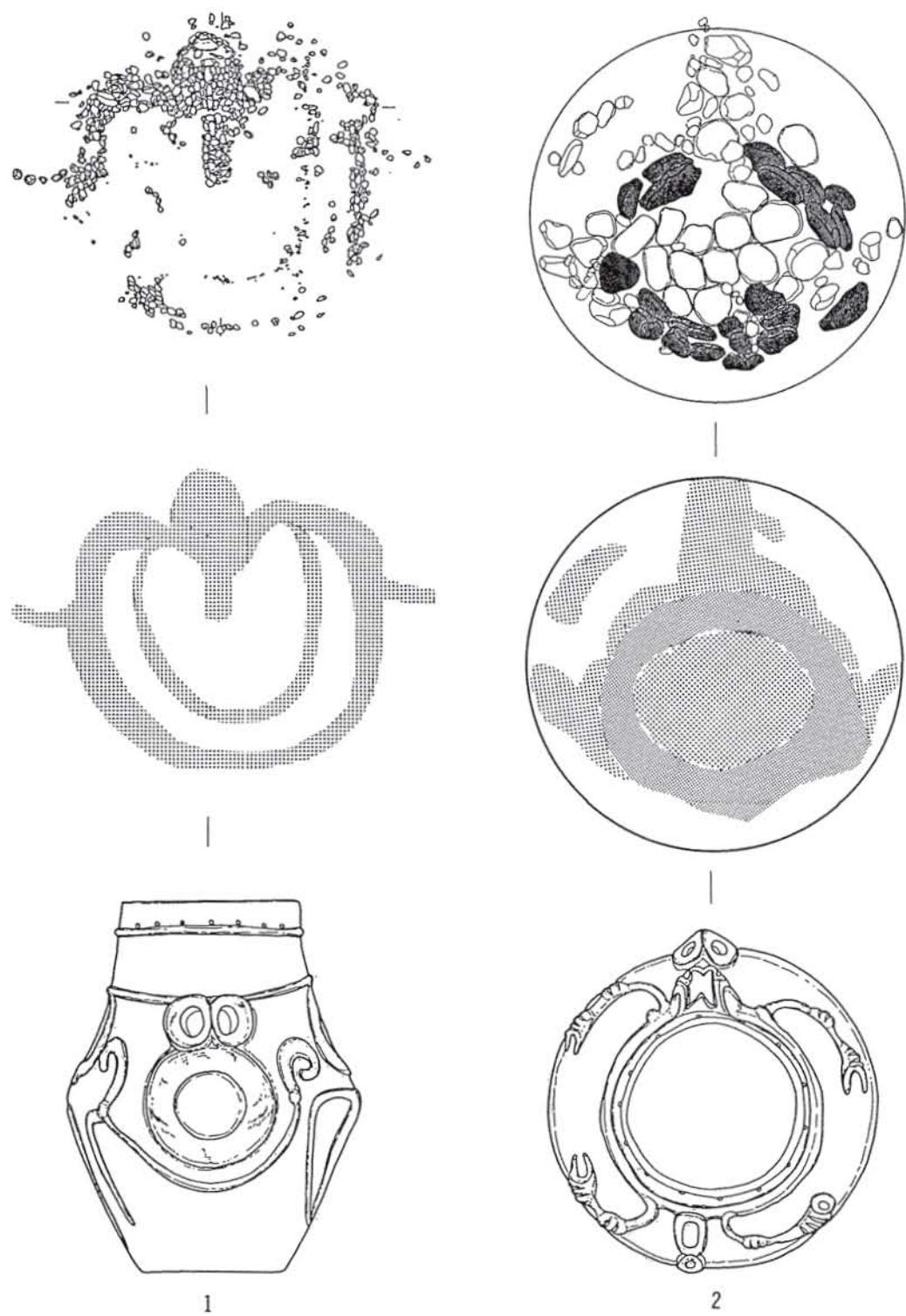


第214図 配石遺構の比較 (右頁につづく)

1; 下北原 2; 茂沢南石堂 3; 修善寺大塔

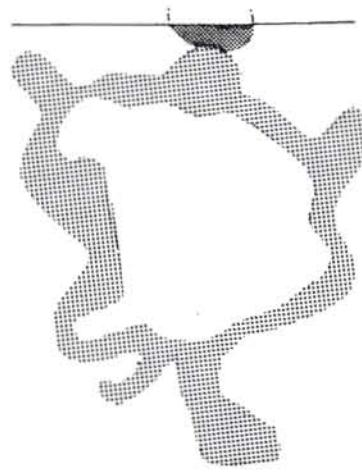
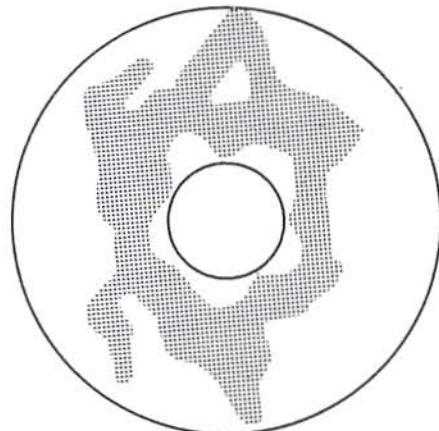
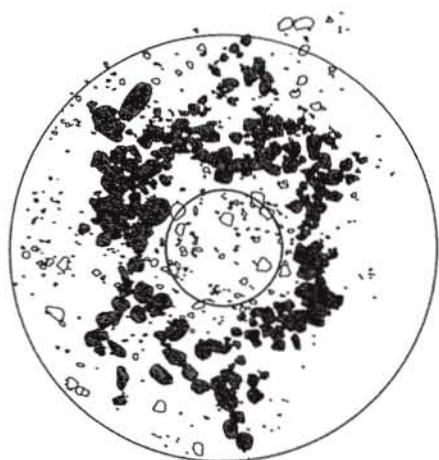


4; 下溝稻荷林 5; 修善寺大塚



第215図 図像の比較 (右頁につづく)

1	上; 下溝稻荷林	中; 模式	下; 土器に付された蛙文 (藤内出土)
2	上; 修善寺大塚	中; 模式	下; 土器に付された蛙文 (井戸尻出土)



3

4

3 上; 下北原 中; 模式 下; 彩陶に付された蛙文 (馬家窯出土)

4 上; 唐渡宮地上絵 中; 模式 下; 非衣に描かれた蛙 (馬王堆 1号墓出土)

考 察

居址から出土した有孔鍔付土器に符合する。真上から見た様は、まさに遊泳する蛙である。配石の西側へ突出する部分は双環の頭に、二重に配列した花弁状の部分は土器の口辺部分に、そして花弁状の石組から飛び出た石列は、前肢・後肢の各部分に対比できる。同じように下北原の配石を眺めると、三角形に配列した西側部分は双環把手に、配石中央の空白部分は土器の口辺部に相当する。そして東側へ延びる石列は、粘土を輪にして連接させた尻尾に対応し、比較資料として挙げた中国の馬家窯類型の蛙文にも似たような表現をみることができる。配石の前肢・後肢の表現（北側部分は不明）は、外側にそれぞれ「く」字状に折れ曲がっていて、井戸尻のものよりは馬家窯の蛙文の四肢の向きに合っている。また、配石の頭部から尻尾を結ぶ外郭線の内側には、沢山の小石が弧状に配され、井戸尻の蛙文の吻端から尻尾を結ぶ土器の肩部を思わしめる。

以上のように比較してくるとこれらの配石は、蛙を題材としたいくつかのバリエーションとして結論づけられる。これらと同じ観点からみるならば、本址は小豎穴を頭とし、石敷で胴体と前肢・後肢を表した蛙だと認識することができよう。そして前肢・後肢の不均衡さは、今まさに斜面をのぼっている様と解せば、納得がいくだろう。とすれば、頭に接する土壇は何であろうか。蛙像という認識からすれば、この土壇の解釈も間接的ながら理解することができる。間接的にとしたのは、論証の手続きとして古代中国の古典と文物に当たらねばならないからである。

今のところ最もよく納得できるものは、長沙馬王堆一号漢墓の棺に掛けられていた“非衣”⁽⁹⁾（絹で織ったT字形をしたもの）に描かれた図像である。蛙は三日月にふんばるようにして、雲気を衝えている。この図像について小林は、「兎がこれから満ちていこうとする月の将来を予測的にあらわしていること、蟾蜍（ヒキガエル）が死せる古い月、しかしこれから甦ろうとしている月をあらわしている」とし、「新月にどっかと腰をおろしたり、後足を踏んばった蟾蜍のさまは、陽をよるべきとする陰、すなわち新しい月に抱かれた古い月の形容にぴったりである」とし、古典中の記載どおりだといふ。⁽¹⁰⁾これらを前提にすれば、土壇は雲気つまり月となろう。よって本址は「月の雲気を食す蟻蛙（ヒキガエル）」と理解できる。

つぎに先住者の住居をすっぽりと覆い重ねているという状況だが、今までの延長で考えてみよう。先住者の住居、つまり古い時期のものであることは、即ち死んでいると解することができる。配石は明らかにそれを覆い、抱いているから、双方を古い月と新しい月に比定できよう。したがって、住居は甦ることを前提に死んでいることになる。先に示した下北原の、配石下面の「黒土層が厚く……」という状況は、古い月しかしこれから甦る光らざる月を暗示しているようだ。

これらから思われる祭祀の内容は、遠い先住者の住居を覆うことによって死に至らしめ、それを前提に新しく住まう居住者たちの場として、その地の再生（復興）を願うというようなこと

であろう。したがって、そのことを表現するには、何よりも不死・再生を象徴する生物である蛙をおいては他になかった、と解釈できよう。

さて、遺構の性格については概ね説明がついたので、最後に一点だけ付記しておきたい。それは「小さな円形に小石を敷きつめたものが密接していた」という発掘の記録である。図面をとれなかったのは惜しまれるが、東西に並ぶ配石の下方にあったことが重要な意味をもっている。この円形集石は、ちょうど配石を東西で二分する中軸線上に位置しており、外側の配石と一体となっていたことは疑いない。これを図像的にみると、本遺跡出土の埋甕に描かれたお産絵画に合わさってくる。密接した配置は別の意味を重ねていると目されるが、左右の乳房と認識でき、女性像の意味も兼ねているようだ。形態的には少し異なる稻荷林の配石中にも、小石を五つ固めてある箇所が右側にあり、何らかの共通点があると思われる。

以上を要するに、本址は蛙・月（新月と甦る古い月）・女性という三者の意味を重ねていると判断できる。

こうして解釈をすすめてくると、中心的主題はやはり「死と再生」という太陰的世界であって、すくなくとも中期中葉以降、悠久の時を経て子々孫々に至るまでその精神が受けつがれていたことを感じとることができる。

おわりに

小稿には、前提となるいくつかの認識がある。ここでは、それらの一つ一つについて触れる余裕がなく十分な説明ができなかつたが、以下にあげる文献を参照していただければ幸いである。

（樋口 誠司）

注

- (1) 『下北原遺跡』 神奈川県教育委員会 1977
- (2) 『軽井沢町茂沢南石堂遺跡』 軽井沢町教育委員会 1968
- (3) 注1に同じ
- (4) 『修善寺大塚』 修善寺町教育委員会 1982
- (5) 『稻荷林遺跡調査概報』 稲荷林遺跡調査会 1981
- (6) 注4に同じ
- (7) 樋口誠司 「大地の月」 山麓考古17 1986
- (8) 小林公明 「月神話の発掘」 山麓考古16 1984
- (9) 湖南省博物館・科学院考古研究所編・関野雄ほか訳『長沙馬王堆一号漢墓』 平凡社 1976
- (10) 注8に同じ

本稿に用いた図版については、転載にあたって若干の加除筆をさせていただいた。